The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	副詞的修飾語をめぐる問題と、行為および関連する出来事の存在
Author(s)	柏端, 達也
Citation	年報人間科学. 1994, 15, p. 119-141
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11987
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

副詞的修飾語をめぐる問題と、行為および関連する出来事の存在

柏端　達也

〈要旨〉

D・デイヴィドソンが一九六〇年代に提案した副詞（副詞的修飾語句）の説明に対し、今日にいたるまで様々な問題が提出されている。それらの問題はもちろん個別的に提出されたものであるが、多くは共通して、副詞のより一般的な動詞依存性（記述依存性）を示唆している。もしその示唆が正しければデイヴィドソンの理論にとって重大な困難が生じる。行為や出来事という存在者に対する副詞による述定という基本的な図式が、空虚になるからである。この論文の結論は、にもかかわらず、その基本的な図式は維持されるというものである。直線的な議論によってその結論に到達するわけではない。この論文において私は、〝行為の他動性〟を考慮し、さらに、いわゆる規約的な行為や、副詞句「～で（with…）」についての個別的分析を行ない、デイヴィドソンが最初に与えた行為文の論理形式を精密化することによって、その結論の擁護を試みた。

キーワード

副詞、D・デイヴィドソン、行為、出来事

1. 副詞の論理形式に対する デイヴィドソンのアプローチ

1－1.

「副詞的修飾語」あるいはたんに「副詞」と呼ばれるものを形式上どのように扱うかは、当然のことながら、古くから論理学者の関心事であった。[1] しかし六十年代の後半、D・デイヴィドソンが簡潔で魅力的な（すくなくとも最初はそう見える）副詞の理論を提出したことにより、言語学的関心をもった論理学者達だけでなく、そうではない多くの哲学者達も、副詞に注意を払うようになる。そしてとりわけ八十年代以降今日まで、副詞の論理形式の問題は、デイヴィドソンの出来事理論をめぐる議論の一つの中心となっているのである。

行為論、出来事論のジャンルの古典的な論文「行為文の論理形式」において、デイヴィドソンは議論に、いわゆる副詞消去推論（ad-verb-dropping inference）の問題に対する解決案の提出という体裁を与えている。たとえば、文

(a) ブルータスはカエサルを大広場にて背中からナイフで刺した
(Brutus stabbed Caesar in the back in the Forum with the knife)

における副詞的修飾語句「大広場にて」、「背中から」、「ナイフで」のうちの任意のものを、われわれは省くことができる。その推論の正当性をいかに形式的に説明するかということが問題である。その問題に対してデイヴィドソンは、(a)の文が行為という存在者を量化していると考え、次の論理形式を与える。

(b) $(\exists x)$(Stabbed(Brutus, Caesar, x) & Into(the back of Caesar, x) & In(the Forum, x) & With(the knife, x)).

ここから、通常の一階の述語論理の規則に従って

(c) $(\exists x)$(Stabbed(Brutus, Caesar, x))

等が導き出されるが、この(c)は「ブルータスはカエサルを刺した(Brutus stabbed Caesar)」という文に対応する。そのように(b)の形の整式化により副詞消去可能性は簡単に説明されるというのである。[2]

1－2.

このデイヴィドソンのアプローチについて三つの点を指摘しておきたい。

一、説明が標準的な一階の量化言語内で行なわれるということは、たんにそれが簡潔でよく知られているという以上に、デイヴィドソ

ンにとって意義をもつ。周知のとおり彼は、一階の述語論理を使ってタルスキ型の真理条件的意味論（の一つのヴァージョン）を自然言語に対して与えるというプログラムを、背景にしているからである。一階の量化言語に対するタルスキ型意味論の与え方はすでに知られている。当のタルスキは自然言語と形式的意味論の調和に悲観的であったが、デイヴィドソンは意味理論と自然言語をつなぐ「媒介装置」を考えることで、そのプログラムを成し遂げようとする。つまり自然言語における諸々の文に対し、同じ真理条件を持ちしかも論理形式が明確化された標準表記（canonical notation）を対応させ、理論はその標準表記に関して構築すればよいというのである。[3] よって自然言語における文の論理形式の解明は、彼のプログラムにとって不可欠な部分を成す。行為文（あるいは、より一般に出来事文）の論理形式の解明という仕事もその文脈において為されたと言うことができる。

二、デイヴィドソンの分析において特徴的なのは、それが行為や出来事というものに対する強い存在論的主張を伴っている点である。もちろん、(a)を行為の上を走る束縛変項を持つ存在文と見なすことが技術的に便利であるということから、行為や出来事が存在するという確信が生じるわけではない（たとえば何かを説明するのに、現実ではない可能世界とそこにおける対応者に言及することが便利であるとしても、それだけでわれわれは、自分の分身がどこか別の次元に存在しているとは確信しない）。彼の出来事の存在論が副詞消去推論に関する議論から始まったことは、他の仕方で議論が始まることが考えられなかったわけではないという意味で、偶然である。存在者としての出来事という発想は自然言語が暗に含む存在論を反映したものである、とデイヴィドソンは考える。彼は、日常の語り方の中に見い出されるいくつかの「証拠」に言及し、さらに物理的事物が存在すると言いうるのと同じ資格で行為や出来事が存在するとまで述べる。[4] そのような明確な哲学的態度が、デイヴィドソンの行為および出来事論を、かならずしも彼のプログラムに賛同する気のない者にとってさえ、興味深いものにしているのである。

三、デイヴィドソンは全ての「副詞」を扱っているわけではない。たとえば「言われるところでは（allegedly）」や「一見（apparently）」などは、そもそも問題の副詞消去推論が成り立たない。「慎重に（deliberately）」、「必然的に（necessarily）」、「驚いたことに（surprisingly）」などは、意味論的に不透明な文脈を形成するむしろ文修飾句であり、出来事の属性を表す副詞ではない。[5] 注目すべきはデイヴィドソンが、「ゆっくり（slowly）」を説明の対象外としていることである。「ゆっくり」は、対応の形容詞「ゆっくりした（slow）」にも共通する問題を孕んでいる。すなわち一つの出来事がすばやいと同時にゆっくりしたものでありうるという問題である。あるゆっくりしたイギリス海峡横断は非常にすばやい泳ぎ渡りと同一でありうるのである。形容詞に関しても生じることから分かるように、この問題は出来事文に特有のものではない。デイヴィドソンはむしろ、このような問題が生じることを、出来事が物理的事物などと同等の存在者であることを示す一つの徴候であると見な

す。[6] 以上のことから、デイヴィドソン的な副詞の説明において「副詞」と見なされるものが副詞である、ということになる。これは循環であるがそれ自体悪性のものではない。彼の説明によって充分に多くの自然言語の表現がすくい上げられるのであれば、問題は生じないのである。（したがって、すでに明らかであろうが、この論文で使用される「副詞」の語の外延は、教科書文法的なそれとは非常に異なっている。[7]）

1－3.

デイヴィドソンによる副詞の扱い方に批判がないわけではもちろんない。事態は逆であり、今日に至るまで数多くの具体的な難問が彼に突きつけられている。もっともそのうちのいくつかは、誤読に基づくものであったり、英語という言語の特異性に引きずられたものである。[8] 幸いそうした「問題」が長く話題に上ることはない。この論文では、デイヴィドソンに対して提出された問題のうち、持続的に議論され、しかも行為論、出来事論の観点から見て啓発性をもった問題を取りあげることにする。

個別的な問題に注目するのは以下の理由による。一つには、具体的諸事例の処理の問題を突きつけることは（あるいは突きつけることこそ）理論にとって充分に強力な批判となるからである。個別的なケースでのつまずきは、もしそれが克服できないものであれば、デイヴィドソンの出来事理論がその重要な部分を依拠するところの日常的直観が（「日常的直観」と呼ばれるものには充分ありうることだが）見逃すことのできない誤謬や混乱を含んでいることを示唆することにもなるだろう。理由の第二は、具体的個別的な問題をめぐる諸議論を包括的に観察すれば、それらがより本質的な事柄をめぐっていることに気づくことが、しばしばあるからである。つまり具体的な諸事例の中に本質は示されるのである。以下では、デイヴィドソンに対する個々の批判を整理しつつ取りあげるとともに、それらに対してデイヴィドソン的な副詞の理論がどのような応答をすべきか、さらにどのような修正を施されなければならないかを、述べよう。

2. パーソンズの問題と最低限必要な述語の座

主語や目的語が特別の扱いを受けるのは英語文法特有の現象である、というのは表層的な意味において正しい。そこで、(b)の第一連言肢の中に行為の〝主体〟と行為の〝対象〟が他の副詞的修飾句と違い、切り離されずに入っていることを不自然に感じた論者は、次のような「改良案」を提出した。

(d) (∃x)(Stabbed(x) & Subject(Brutus, x) & Object(Caesar, x) & Into(the back of Caesar, x) & In(the Forum, x) & With(the knife, x)).

今日多くの論者が、それぞれが主張するところの「利点」は異な

るものの、この(d)のような表記法を採用している。[9] そして(d)のような表記法を提唱する側から、いくつかの問題が、いささか奇妙なことにデイヴィドソンの解決すべき課題として、提出されることになる。

T・パーソンズは以下のような問題を提起した。次の(e)と(f)がともに成り立っているとしよう。

(e)ジョーンズはスイッチをひねった。(Jones flipped the switch.)[10]

(f)ジョーンズは空き巣に警告した。(Jones alerted the prowler.)

ところでデイヴィドソンは、特徴的にも、(e)を真にする個別的な出来事が同時に(f)をも真にしうると考える。ジョーンズがスイッチをひねり、そうすることによって部屋の明かりをつけ、さらにそれによって部屋の中を窺っていた空き巣に住人がいると警告したとする。この場合デイヴィドソンの考えによれば（そしてその考えを彼はG・E・M・アンスコムから引いてきたと言うが）、ジョーンズがスイッチを押したそのこととジョーンズによる空き巣への警告は同一の行為である。[11] それで、その同一性言明に従って(e)および(f)を、動詞の主語と目的語のための座を分離した形でまとめると、次の式になる。

(g) (∃x) (Flipped(x) & Subject(Jones,x) & Object(the switch,x) & Alerted(x) & Subject(Jones,x) & Object(the prowler, x)).

ここから適当な連言肢を落すことにより「(∃x) (Flipped(x) & Subject(Jones, x) & Object(the prowler, x)」が導き出されるが、しかしそれはつまり、

(h)ジョーンズは空き巣をひねった (Jones flipped the prowler)

ということであり、とうてい受け入れられない。[12]

パーソンズも気づいているが、デイヴィドソンの表記法はこの困難から免れている（このことはおそらくパーソンズが考えている以上に重要な違いを含意するのであるが）。すなわち

(i) (∃x) (Flipped(Jones, the switch, x))

は、パーソンズが行なった連言肢の入れ換えを許容しない。そしてデイヴィドソンは、この(i)の形のものしか、つまり(d)や(g)のような形のものは、認めないのである。デイヴィドソンはパーソンズに答えて、おのおのの述語のそれ以上削ることのできない最低限の座の存在を強調する。[13] 問題はそのようなものがあるかどうかである。ここで、デイヴィドソンが自然言語の構造を記述する理論を目指していること思い出す必要がある。もし他動詞の「flip」を含む「Jones flipped」が日常において使用される場面をもたないのであれば、

それらに論理形式を与える義務はデイヴィドソンには生じない。そして事実、「ジョーンズはひねった（Jones flipped）」が特定の文脈における省略形としてではなく使用される場面を、私は想像できない。日常のわれわれの語り方を重視するなら、パーソンズが示した「困難」は、問題ではないのである。

パーソンズの問題への個別的な対処としては、たしかに自然言語における述語の座の分離不可能性を指摘することで充分であろう。だが私は、この分離不可能性についてさらに一般的な観点から論じてみたい。この論点にはあとで再び戻ってくる。

3．ウォーレスの問題とエヴァンスの問題

3－1．

J・ウォーレスが以下のような問題を提起したとされる[14]。すなわち、

(j)メアリーは8番ボールをサイド・ポケットの中に、そして9番ボールをコーナー・ポケットへの中に、打った（Mary hit the 8-ball into the side pocket and the 9-ball into the corner pocket）

と言いうるような状況において存在する打つという行為がただ一つであるとすれば、デイヴィドソンの整式化では(j)は次のようになるだろう。

(k) (∃x)(Hit(Mary, the 8-ball, x) & Into(the side pocket, x) & Hit(Mary, the 9-ball, x) & Into(the corner pocket, x)).

だがここで、正当な手順に従って連言肢の位置を入れ換えることにより、次のような文が導き出されてしまう。

(l)メアリーは9番ボールをサイド・ポケットの中に、そして8番ボールをコーナー・ポケットの中に、打った。（Mary hit the 9-ball into the side pocket and the 8-ball into the corner pocket.）

よほど異様な形のビリヤード台を使用していないかぎり、(j)と(l)が同時に真になることはない。しかし、デイヴィドソンの与えた論理形式では二つはつねに同値になるのである。これがウォーレスの問題である。

この問題は、厄介なことに、述語の座の数の下限に訴えることでは解決しない。ここで「〜の中に（into...）」を組み込んで「打つ（hit）」を四項述語にしてしまうと、(j)から「メアリーは8番ボールを打った（Mary hit the 8-ball）」というけっして不自然ではない文への推論が、論理形式で説明できなくなるからである。

たしかに(j)の多義性を指摘することもできる。(j)がただ一つの行為によってのみ真にされると考えるべき理由はない。そこである論

者は、(j)を、メアリーによる二つの行為をそれぞれ量化する二つの文が文法上の省略規則に従って主語と動詞を共有し一文になったものと解釈することによって、困難を回避できると考える。[15] しかしそれで問題が根本的に解決されるわけではない。メアリーが一回の動作で、つまり一度のキューの突き出しによって、8番ボールと9番ボールをそれぞれのポケットの中に打つことは、充分に可能である。そしてその場合デイヴィドソンならば、その8番ボールを打つという行為と9番ボールを打つという行為は、これこれの仕方でキューを前に突き出すという行為を経由して同一である、と結論することになるからである。

3－2.

とはいえ、問題となっている出来事がむしろ複数と見なすべきものではないかと疑ってみることは、非常に重要である。ある種の問題は詳細な記述を与えることで解決される。そのことを見るために、類似の、しかしそれほど厄介ではない問題を取り上げよう。B・テイラーによれば、G・エヴァンスが彼に次のような内容の問題を指摘した。すなわち、もし

(m)シェムはショーンを、シレイラ型棍棒で乱暴に、しかしカジェル型棍棒では乱暴にではなく、殴打した（Shem hit Shaun with the shillelagh violently, and with the cudgel but not violently）

を真にする一つの行為が存在するとすれば、デイヴィドソンの整式化では、

(n)シェムはショーンを、カジェル型棍棒で乱暴に、しかしシレイラ型棍棒では乱暴にではなく、殴打した（Shem hit Shaun with the cudgel violently, and with the shillelagh but not violently）

が導き出されてしまうというのである。[16]

テイラーは、シェムがたとえば右手にシレイラ型棍棒を左手にカジェル型棍棒を持ち同時にショーンを殴る状況を考えている。そして彼は、生起した時間の一致からそれらが同一の行為であると結論する。たしかにテイラーの枠組みではそう結論せざるをえないだろう。だがしかし、われわれが同時に二つ以上のことを行なえることは明らかであると思われる。人は口笛を吹きながら階段を駆け降りることができる。さらにまた、二つの行為がより上位の一つの行為の部分であるということも可能であろう。たとえばある曲を演奏することは、特定の仕方でマリンバを叩くことと、声を出すことから成っているかもしれない。エヴァンスの例について言えば、右手と左手による二つの殴打全体を一つの複合的な殴打（「暴行」と言った方が自然であるかもしれないが）として扱うことに問題はない。だが、部分を成す諸殴打がもつそれぞれの属性を、全体である複合

的殴打がそのままもっていると決めつけるのは明白な虚偽である。いずれにせよエヴァンスの例では正確には二つの行為が問題とされていると考えるべきであり、であれば問題は生じない。

テイラーは、三項の「Hit」と、殴る道具のための座を組み込んだ四項の「Hit+」の二種類があると考える「解決策」を提案している。[17] おそらく彼はウォーレスの問題についても同様の答え方をするだろう。しかし当然、ウォーレスの問題のケースにおける「hit」にも「with」に関して多義性が存在することになろうから、「into」に関する多義性を考え合わせると、これだけですでに四種類の「hit」があることになる。これはあきらかにデイヴィドソンが議論を始める前の状態への後退である。また、肝心の「多義性」の中味は、はっきりしているだろうか。われわれは、テイラーの指摘する二種類の「hit」が、「sink」に自動詞と他動詞の二種類があると言う場合にも、さらに「殴る」には素手で殴る場合と道具を使って殴る場合の二種類があると言う場合にもあたらない点に、注意しなければならない。

たしかにウォーレスの問題も、あるいはエヴァンスの問題も、デイヴィドソンが主張するタイプの出来事の同一性言明をそもそも受け入れないならば、生じない。しかし私は、問題の核心は行為文の論理形式の与え方にあると考える。つまり、出来事の同一性に対するデイヴィドソン的な立場を保持したままで困難を回避することは可能なのである。

4. 行為の他動性とウォーレスの問題の解決

4-1.

とくに八十年代に入って強調され始めたことは、いわゆる「他動詞」を含む行為文の多くが、二つあるいはそれ以上の出来事を量化しているという論点である。[18] ここではそれを〝行為の他動性の観点〟と呼ぼう。[19] その観点からすると、冒頭の「ブルータスはカエサルを刺した」は、

(o) (∃x)(∃y)(Action(Brutus, x) & Was stabbed(Caesar, y) & Caused(x, y))

と整式化される。[20] ある意味で不完全であったと言える(b)や(c)の形の論理形式のそれぞれに対し、こうした(o)の形の書き換えを与えることができる。そしておそらくそれは、個々の動詞に対する定義として与えられることになるだろう。

この観点はウォーレスの問題の解決に役立つ。それによれば問題の(j)の論理形式は、(k)よりはむしろ、次の(p)のように与えられるべきであった。

(p) (∃x)(∃y)(∃z)(Action(Mary, x) & Was hit into(the 8-ball, the side pocket, y) & Was hit into(the 9-ball, the corner pocket, z) & Caused(x, y) & Caused(x, z)).

第二、第三の連言肢は、メアリーの行為の二つの結果を表現している。この(p)に従えば、(j)は一つの行為を量化するとともにその行為の二つの結果をも量化している、と言うことができる。(j)における8番ボールとサイド・ポケットの不可分性は、8番ボールがサイド・ポケットの中に打ち込まれるという出来事（それは要するに、8番ボールがサイド・ポケットに入ることと同一なのだが）の存在に由来するものだったのである。[21]

4-2.

こうした行為の他動性の観点に対するデイヴィドソンの態度の変遷について簡単に述べておこう。一九六七年の論文で、行為文の論理形式を(b)のような形で表現したとき、デイヴィドソンは行為の他動性の観点を軽視していた。その顕著な表れとして、彼は、H-N・カスタニェーダへの返答の中で「私はビスマルク号を沈めた」と「ビスマルク号は沈められた」と「ビスマルク号は沈んだ」の間の関係およびそれらに関連する出来事の存在について論じる機会があったにもかかわらず、曖昧な仕方で論点を逸らしている。[22] その理由の一つは、当時デイヴィドソンが、行為とは出来事をひき起こすことであるという見解全般に対して警戒心を抱いていたからであろう。だがデイヴィドソンの批判は、正確には、行為を、行為者が出来事をひき起こすこととか、行為者がある事態をもたらすことへと分析する見解に向けられるべきものである。そうした見解は、行為文の論理形式の問題を何も解決しない上に、不用意な仕方で行為者性を導入しかねない、というのが彼の批判であった。[23] したがって(o)や(p)に示されるような見解はこの批判にあたらない。一九八五年以降に刊行された論文においてデイヴィドソンは、ほぼ明確に、行為の他動性に言及するようになっている。[24]

5. 再び、空き巣をひねることについて

「空き巣をひねった」が導出されるというパーソンズの問題もこの観点から解決可能である。(o)の要領で、スイッチをひねったことであり空き巣への警告でもあるようなジョーンズの行為が存在するという状況は、

(q) (∃x)(∃y)(∃z)(Action(Jones, x) & Was flipped(the switch, y) & Was alerted(the prowler, z) & Caused(x, y) & Caused(x, z))

と表現される。この(q)から、第一、第二、第四連言肢により「(∃x)(Flipped(Jones, the switch, x))」が、そして第一、第三、第五連言肢により「(∃x)(Alerted(Jones, the prowler, x))」がそれぞれ導出されるが、「(∃x)(Flipped(Jones, the prowler, x))」や「(∃x)(Alerted(Jones, the switch, x))」などは導出されない。[25]

問題は、動詞から目的語を分離した形で表記すべきかどうかであった。そして「空き巣をひねった」が導き出されるということが、

まさに、目的語のための座を分離して表記することの不都合を示している、と私は考える。(q)の論理形式から分かるように、警告される受動者としての空き巣は、定義の形で「警告する（alert）」という他動詞の中に組み込まれており、他方、ひねられる受動者としてのスイッチは「ひねる」という他動詞の中に組み込まれている。つまり何が受動者であるか、何が行為の〝対象〟であるかは、当の行為をどのように記述するかに依存しているのである。

主語や目的語が分離された(d)や(g)の形は、表記法上の可能な選択肢の一つというわけではなく、出来事の特徴と出来事の記述の特徴に関する根本的な混乱を含む受け入れがたいものであるように思われる。さらに、それらにおける主語の分離についても異議を述べる用意があるが、その前により包括的な視点から問題を捉え直してみよう。

6．ほとんどの副詞が記述に依存するのではないか

行為の他動性は、あるケースの副詞の動詞への結びつきを適切に説明する。パーソンズおよびウォーレスの問題は、その他動性の観点からアド・ホックでない解決を与えることができた。[26] 個々の批判が全く異なる動機や観点からそのつど提出されたものばかりであることも不思議ではないのだが、デイヴィドソンの副詞の説明に対して提出された多くの問題に関して言えば、じつは、それぞれが全くの断片ではなく、ある一つの話題をめぐっていると見ることができる。

デイヴィドソンによる副詞の扱い方に対しては七十年代から、より一般的な仕方で副詞と動詞の不可分性、副詞の動詞への本質的な依存性を問う、ある疑念が存在する。[27] それはたぶん、すでに挙げたパーソンズ、ウォーレスの問題にも通底している。その疑念に表明された論点は、もしそれが本物であるならば、デイヴィドソンの副詞の理論にとって重大な困難となるだろう。以下にそれぞれ独立に提示されたいくつかの例を挙げよう。

たとえばジョンが閉まっているドアに歩いていき衝突し、その様を見ていたメアリーが笑ったとする。ジョンはドアにぶつかっていくことによってメアリーを笑わせたのである。ここでデイヴィドソンに従えば、ジョンによるメアリーのその笑わせは、ジョンが閉まったドアに向かって歩いていくこと、あるいはジョンのドアへの衝突と同一である。だがこのきわめてデイヴィドソン的な同一性言明を認めるとすると、「ジョンはそのドアにぶつかっていった」と「ジョンはメアリーを笑わせた」から、

(r)ジョンはメアリーをそのドアに笑わせた（John amused Mary into the door）

という奇妙な文が導き出されはしないだろうか。[28] 同様にして、丘の上へに向かって歩くことが、家の住人が帰ってきたことを知らせる警告を意味するという取り決めが二人組の空き巣の間に存在する状

況において、その見張り役の歩行と警告との同一性から、

(s)見張り役は丘の上に向かって相棒に警告した（The sentinel warned his partner uphill）

が導き出されように思われるし、[29] また、オズワルドが銃でケネディを撃ったことをオズワルドが彼の銃の引き金を引いたことと同一視すれば、実際にオズワルドは人差し指で引き金を引いたにもかかわらず、

(t)オズワルドは銃で引き金を引いた（Oswald pulled the trigger with the gun）

が導き出されるように思われる。[30] これらは、正しい状況とは全然別の状況を意味するか、そうでなければナンセンスであり、いずれにせよ受け入れがたい。

重要な点は、アンスコムが指摘しているように、出来事の生起の場所と時間を表現する副詞以外の、おそらく全ての副詞に関して、こうした奇妙な文が導出される状況を想定しうると思われることである。デイヴィドソンも、「ゆっくり」などの副詞が動詞と密接に結びついている状況を観察し、それらを説明の対象から除外した。つまりデイヴィドソンの副詞の説明においては、まさにその説明を適用しうるものが副詞とされるのであるが、そのことに関していまや困難が生じた。デイヴィドソン的な副詞の説明の適用範囲から、ほとんどのものがこぼれ落ちようとしているのである。もしそうであれば理論の有効性にとって致命的である。水をすくうために手にしたものがざるだったとしたらどうであろう。ひょっとするとざるですらないかもしれない。まず、出来事の生起の時間を表現する副詞は、結局は何らかの仕方で、時制とともに標準表記の中につねに組み込むことができるものと思われる。[31] そのうえかりに、出来事の生起の場所は出来事の主体が位置する場所にほかならないので出来事の生起の場所を表す副詞の消去にデイヴィドソン的な説明は不必要である、というJ・ベネットの主張を受け入れたとする。[32] すると、デイヴィドソン的な説明は全く何も説明しないことになってしまうのである。さらに事態は、デイヴィドソンが基づいている自然言語における出来事の存在論にとってもきわめて厳しいものである。物理的事物に対する形容詞と出来事に対する副詞という基本的な類比図式が、空洞化の危機にさらされているからである。

7. 何がどのように記述に依存するのか

前節の困難に対する私の見解は、すでに部分的に示されているが、まとめると次のようになる。一、この困難はデイヴィドソン的な出来事の同一性言明を禁止する根拠にはならない。二、行為の〝対象〟や出来事の〝主体〟は、たしかに記述依存的である。三、行為の他動性などすでに論じた論点を考慮することで、指摘された奇妙な文

のいくつかは正常なものに書き直すことができる。四、それ以外の奇妙な文も類似の仕方で書き直すことができる。五、ただし行為の道具を表す「〜で（with…）」といった副詞句については、個別の、慎重な考察が必要である。以上の論点を順に述べよう。

7−1.

第一の論点について。たしかに次のように言うことはできる。デイヴィドソンの特徴的な同一性言明を認めないならば、パーソンズやウォーレスの問題も含めこれまで述べてきた一切の困難はそもそも生じない。現に、前節で描写した論点に触れる論者の多くは、それを、デイヴィドソン的な同一性言明を拒否するための根拠に用いている。[33] だが、副詞の記述依存性それだけを根拠にデイヴィドソン的な同一性言明を放棄するのは理不尽である。それは、背の低いバスケットボール選手が背の高い日本人でありうるという事実に驚いて、「あの日本人が例のバスケットボール選手だ」という同一性言明の主張可能性を否定してしまうようなものである。問題は別のところにある。

7−2.

第二の論点について。行為のいわゆる〝対象〟の記述依存性については、空き巣がなぜひねられないのかを論じたさいにすでに指摘した。〝主体〟についてはどうだろうか。ベネットの次の議論から考えよう。すなわち、

「散歩がボローニャでのものであったと言う代わりに、われわれは、その時点でジョンがボローニャにいたと言えばよい。ある具体的な出来事に直接あてはまる形容詞句に対応する副詞句はどれも、その出来事の主体に直接あてはまる形容詞句とも、対応しているのである。[34]」

これに対し次のように反論できるだろう。まずベネットは、出来事の〝主体（subject）〟となりうる存在者の位置する場所が、出来事の生起の場所に比べてはるかに明確である、という議論の余地のある見解を無条件に前提としている。かりに出来事と関係しうる諸存在者の位置が出来事の場所の概念の助けを借りずに完全に把握できるとしても、それら存在者のうちのどれが〝主体〟であるか規定するのに、出来事の場所の概念が用いられることはないだろうか。だとすれば議論は循環している。しかし目下の関心から指摘すべきは、そうしたことよりもむしろ、一般に出来事の〝主体〟とされるものの位置する場所が出来事の生起の場所と異なりうる、ということである。出来事の記述は標準的には、文の名詞化として与えられる。したがって出来事の記述において主語（不幸にも英語ではこれも‘subject’と呼ばれる）に相当するものが何であるかは明確である。だがそこから、それぞれの出来事が〝主体〟と呼ぶべき不変固有の何かを備えていると即断すべきではない。ここに行為と行為でない出来事との重要な相違点がある（そして行為の例のみを扱うことの危険性もここにある）。行為の主体について語る場合と異なり、われわれは出来事の〝主体〟というものについて、擬人化と見なす

べきいくつかのケースを除いてほとんど直観的な理解をもっていないのである。おそらく、出来事の記述において主語に相当するものというのが、〝主体〟の語の唯一許容可能な意味であろう。すると、何が出来事の〝主体〟であるかは、出来事をどう記述するかに依存することになる。[35]

ここにおいて、一般に〝主体〟の座を分離して表記することの不適切さが明らかになる。具体的な例で述べよう。かりに出来事に不変固有の一つの〝主体〟があると仮定すれば、「飛行機は尾翼を失った」は次のように表記されることだろう。

(u) (∃x)(Lost(x) & Subject(the airplane, x) & Object(the tail, x)).

だが(u)が量化する出来事は、「尾翼が飛行機から取れたこと」とも、あるいは「飛行機の尾翼と尾翼以外の部分が分かれたこと」とも、表現しうると考えられる。[36] したがって、文「飛行機は尾翼を失った」を真にする個別的出来事、その飛行機が尾翼を失ったことは、尾翼がその飛行機から取れたことと同一であると言うことができる。同じ出来事を指示するそれら二つの名辞において主語に相当するものはそれぞれ異なっている。それぞれ異なっているがゆえに、分離された〝主体〟を適当な手順で入れ換えることにより、

(v)その尾翼は尾翼を失った (The tail lost the tail)

という誤った文が導き出されてしまうのである。ここから分かることは、何が出来事の〝主体〟であるかが、行為の〝対象〟の場合と同様、出来事の記述の属性であるということである。

7-3.

第三の論点に関して。(r)が導き出されるとされる状況の記述は複数の解釈を許容する。もしジョンがドアにぶつかったからこそメアリーが笑ったのであれば、ジョンは衝突することによって笑わせたのである。衝突とはつねに何かとの衝突であるので、衝突の対象の座は分離できない。よってこの場合(r)が導出される余地は実際にはない。他方、ドアが閉まっているにもかかわらずジョンがそれに向かって敢然と歩いていく様をメアリーが笑ったのであれば、ジョンは特定の仕方で歩くことによって笑わせたのである。この場合、閉まっているドアへの方向性は、歩行という出来事がたまたま有している一つの属性として、その出来事が歩行であることを表現する連言肢から分離された形で、表現されるべきであろう。するとたしかに、「(∃x)(Amused(John, Mary, x) & Into(the door, x))」が導出される。問題はこれをどのように日常的な表現に書き換えるかである。ところがこれは、第4節で述べた論点を思い起こせば明らかであるが、

(w) (∃x)(∃y)(Action(John, x) & Into(the door, x) & Was

amused(Mary, y) & Caused(x, y))

のことにほかならない。この(w)は、「メアリーの笑いをひき起こし、かつドアに向かうものであるような行為が存在する」と読むことができ、そこに不自然さはない。もはや(r)の奇妙さが標準表記から日常的な表現への変換の拙さに由来するものであることは、明確であろう。

7－4.

第四の論点に関して。たとえば(s)のケースは、〝規約的な行為〟についての個別的な考察を必要とする。要点は、警告がかならず何ごとかを為すことによって為されるということである。警告すること、あるいは挨拶すること、契約すること、サインを出すことなどは、いわゆる基礎行為ではありえない。[37] したがって「警告すること」はつねに、より原始的な形として、「警告を意味するような何ごとかを為すこと」という言い換えをもっている（「球をポケットに入れること」がつねに「球がポケットに入ることをひき起こす何ごとかを為すこと」に言い換え可能であるように）。(s)が問題となった状況で丘の上に向かう運動性を有していたのは、まさに、その為された何ごとかにほかならない。つまり見張り役によるある行為が存在し、それが警告であるとともに、かつ丘の上に向かう（uphill）ものだったのである。このように、より原始的に述べることで、警告と丘の上に向かう運動性との奇妙かつ不適切なつながりは解消される。日本語における「丘の上に向かって」の多義性は、「丘の上に向かいつつ」などと言い換えることにより解消されるだろう。[38]

問題はここでも、標準表記から日常的な表現への変換の仕方にある。もちろん変換が全く無秩序になされることは容認できない。しかし他方、日常的な表現の本性ゆえにある程度の自由度が必要である。そして、(p)、(q)、(w)のような原始的な形の表記からの秩序だった変換が、厄介な帰結を生み出さずに可能であるということによって、それらの要件は満たされるのである。

7－5.

(t)についてはさらに個別的な考察が必要である（ただしここではその端緒を示すことしかできないが）。まず、前述の「ゆっくり」を「イギリス海峡の横断としてはゆっくり」に分析するような仕方で、[39]「銃で」を「狙撃としては銃を用いて」に分析するのは適切でない。というのもオズワルトの行為は、狙撃としてのみ銃を用いたものではないからである。つまりオズワルドは銃で狙撃しただけでなく、銃でケネディを殺害したのであるし、また、ケネディの死が多くのアメリカ国民の悲しみをひき起こしたのであれば、すくなくとも一つの意味では、たった一丁のその銃で多くのアメリカ国民を悲しませたのである。こうした推論はさらにいくらでも可能であると私は考える。したがって「銃で」は「狙撃」という単にその記述のみに関わっているのではない。[40] 一方、(t)のようにはなお言いえないと主張したい。ここで、副詞句「銃で」があてはまらない記述（「引

き金を引くこと」等）はオズワルドの別の行為を記述していると考え、デイヴィドソン的な同一性言明を部分的に否定するのは、得策でない。[41] それでは「銃で」という副詞句を形式的にどのように扱えばよいのだろうか。

二つの問題がある。副詞句「〜で」を論理形式上どのように表現するかという問題と、それを含む文脈の、いま述べた〝部分的外延性〟をどのように説明するかという問題である。それらの問題に対し、一つの可能性として以下のような提案をしたい。

「銃で標的を撃つ」が「銃をどうにかする（ふつうは発砲する）ことによって、標的に弾丸を命中させる」に言い換えられるように、一般に

(x) AGENT が $OBJECT_1$ で $OBJECT_2$ を ϕ した（AGENT ϕ-ed $OBJECT_2$ with $OBJECT_1$）

の形の文は、動詞 ϕ が他動的[42]であるかぎり、

(y) $(\exists x)(\exists y)(\exists z)$(Action(AGENT, x) & Was ϕ-ed($OBJECT_1$, y) & Was ϕ-ed($OBJECT_2$, z) & Caused(x, y) & Caused(y, z) & Caused(x, z))

という論理形式、もしくはそれに準ずる論理形式[43]の文に、書き換え可能である。因果関係の推移性を認めるのであれば最後の連言肢は省略してよい。(y)における ϕ するという行為が具体的に何であるかは、当然(x)の文からは特定できない。[44]

ここでさらに、(y)の論理形式をもつものは全て(x)の形に表現することができると仮定してみよう。すると必要な推論は保証される。つまり、問題の副詞句「〜で」に関する〝部分的外延性〟が説明可能になるのである。弾丸の貫通、ケネディの死、アメリカ国民の悲しみ…という行為の諸結果の因果連鎖を考慮に入れ、そこから適当に(y)の形のものを拾い上げることによって、「オズワルドは銃でケネディを殺害した」、「オズワルドは銃で多くの国民を悲しませた」、「オズワルドは弾丸でケネディを殺害した」[45]等々の文を導き出すことができる。だが、それらと同じ資格で、次の(z)のような文までもが導き出されることになる。

(z) オズワルドは、ケネディで、多くのアメリカ国民を悲しませた。

この(z)に不都合な点はないだろうか。(z)はナンセンスではない。そのことは、「ケネディで」を「ケネディを使って」や「ケネディを利用して」と言い換えることにより明瞭になる。異論があるとすれば、(z)がもともとの状況にそぐわないのではないかということに関してである。(z)が成り立つ状況においては、ケネディの死は意図されていたにしてもあくまで〝手段として意図されていた〟[46]のであり第一の目的ではなかった、と言うのが自然であろう。しかし実際そうではなかった。オズワルド（主）が（将）ケネディを殺せばそれでよかったの

であり、世間の人々のことなど眼中になかった。[47] にもかかわらず(z)がつねに導き出されてしまうのである。たしかに(z)が状況にあてはまるよう「で（with）」の意味を限定することもできる。[48] しかしたんにそうするだけでは、「で」の意味の重要な部分（むしろ「〜を使って」や「〜を利用して」と言い換えることによって前面に出る意味）が切り捨てられてしまうことだろう。この事態を深刻なものと見なすのであれば、(y)から(x)への推論に何らかの条件を付け加えなければならない。[49]（それでも(y)は必要条件であり続けるだろうが）。この方向に沿って議論を進めるには、「意図する」、「目的」あるいは「手段」や「道具」といった概念の、さらに慎重な分析が必要である。したがって副詞句「〜で」の問題はまだ解決されない。だが、すくなくとも議論が副詞の論理形式の問題から離れていく地点を確認することはできた。

8. 結語

あたかも形容詞が物理的事物を述定するように、副詞は出来事という存在者を述定する。デイヴィドソンの副詞の理論におけるこの基本的な図式に対して、疑念が呈されていた。個別的に提出された問題の多くは、つねに意識されているとはかぎらないが、その根底的な疑念を背景にしていた。この論文で私は、デイヴィドソンの副詞の理論に対する決定的な批判となりかねないその疑念を払拭することにつとめた。それは、八十年代に展開した議論を考慮に入れ、また、いくつかのタイプの副詞に対しさらに個別的な分析を行うことによってであり、一刀両断にではなかった。

「行為文の論理形式」においてデイヴィドソンが提出した行為文の整式化が充分なものでなかったことは、いまや明らかである。副詞を含む文に論理形式を与える作業は、当初デイヴィドソンが考えていたほど単純ではない。この事態は予想されていてもよかった。形容詞による物理的事物の述定もまた、見かけをはるかに上回る多様さを備えているからである。しかしいずれにせよ、出来事の属性を表す述語としての副詞という基本図式は崩れない。たとえばある種の副詞句については、それが行為そのものではなくむしろ行為に関連する出来事（すなわち行為の結果）に関わるものであることが分かった、ということである。

注

(1) 古典的なものとしては、一九四〇年代にすでにH・ライヘンバッハが高階の述語論理を用いた副詞の分析を行なっている（邦訳一九八二年、三一三―三二四頁参照）。また、R. Clark 1970 や T. Parsons 1970 において、副詞を述語演算子と見なし、拡張された一階の述語論理の中で扱うアプローチが提案されている。この論文でそうしたアプローチの一つ一つを検討することはないが、それはそれらに可能性がないと考えているからではない。

(2) D. Davidson 1967a を参照。論理学の教科書が教えるような形式によって一階の量化言語内で副詞消去推論の正当性を示すことは不可能に思える。「ブルータスはカエサルを大広場にてそのナイフで刺した」をふつうに四項述語で「Stabbed4(Brutus, Caesar, the Forum, the

knife)」と表現すると、たとえば「ブルータスはカサエルをそのナイフで刺した」は三項述語で「Stabbed³(Brutus, Caesar, the knife)」、「ブルータスはカサエルを刺した」は二項述語で「Stabbed²(Brutus, Caesar)」と表現される。だがそれら三つの述語は、共通の統語論的要素を含んでいながらそれぞれ全く別物なのである。さらに(a)にはまだいくらでも副詞的修飾語が付け加わりうる（「ブルータスはカサエルを大広場にて背中からそのナイフで午後四時ちょうどに跳びはねるようにして…」）。もしそれらのそれぞれに異なった多項述語を割り当てるとすれば、われわれは語彙目録の中に無限個の述語をもつことになってしまい、それは受け入れられない。自然言語の意味理論は潜在的に無限個の文を扱うのであるが、デイヴィドソンによれば、われわれが言語を習得できている以上、理論自体は有限的でなければならないからである。

(3) Davidson 1967c, p.29〔邦訳一八頁〕; 1977, p.203〔二一〇－二一一頁〕; 1970b, p.140, p.144〔一九〇、一九七頁〕を参照。

(4) Davidson 1967a, pp.108-109〔一三四頁〕; 1969, pp.164-167, p.180〔二三二－二三六、二五八頁〕; 1970a, p.181.

(5) Davidson 1985a, pp.234-235.

(6) Davidson 1967a, pp.106-107〔一三一－一三二頁〕; 1985b, p.228.

この「ゆっくり」のように使用された副詞を、J・ベネットは適切にも「動詞依存的（verb-dependent）」と表現する（Bennet 1988, pp.183-184）。形容詞については伝統的に「限定用法（attributive use）」という言葉がある。この論文ではそうした使用を総じて「記述依存的」と表現することにしたい。

(7) このような態度はすくなくともある程度必要である。日本語の「もし」や英語の「not」さえ教科書文法に従えば「副詞」に分類されるが、そうしたものまでをも一括して扱うべき動機は見あたらない。逆に「穏やかに」などの形容動詞の連用形や、「with the knife」といった複合的な句は、教科書文法的には「副詞」でないものの、われわれが問題にすべき対象であると思われる。「副詞的修飾語句」というのがおそらくそれらに対するより適切な呼称であろうが、簡便のためこの論文ではたんに「副詞」と呼ぶこともある。

(8) たとえば「I sank the Bismarck」を「(∃x)(Sank(x) & Subject(I, x) & Object(the Bismarck, x))」と書き換えるとする。するとそこから「正当な」手続きにより最後の連言肢を落とすことで、「I sank」が導出されるのであるが、最初の英文が真であるにもかかわらずこの英文が偽であることはしばしば生じる（沈めた本人はふつう沈まないので）。だがこれは難問ではない。明らかにこのケースでは、「sank」の意味が異なっているからである。実際この「問題」を日本語に翻訳することはできない。とはいえ、自動詞と他動詞の間の特有の関係（それはまた、極の「pole」と竿の「pole」などの同音異義語の関係とも区別されるべきである）にわれわれの目を向けさせる点で、この指摘にも価値はあるかもしれない。

(9) たとえば Parsons 1985, pp.265-266 において、また（ここでの議論と関係のない点での相違があるが）Lombard 1985, pp.272-273 においても、(d)のように分離された表記法が提案されている。そして今日、とりわけ言語学的、文法学的な関心をもつ多くの論者によって、(d)のような表記法がふつうに受け入れられている。ここで、「Subject(x, e)」や「Object(x, e)」が、たんに表層的な主語や目的語というだけでなく、ある行為に固有の〝主体〟や〝対象〟を表すと考えられている点が、要点である。

(10) 複数の理由から例文には英文を添えるが、語のもつニュアンスより論理形式の対応を重視したため、この(e)のように、かならずしも正確な翻訳にはなっていない。

(11) Davidson 1963, pp.4-5〔四－五頁〕; 1971, pp.57-58〔八五－八六頁〕. このような彼の特徴的な出来事に関する同一性言明については、拙論 1993a で論じておいた。

(12) Parsons 1985, pp.262-263.

(13) Davidson 1985a, p.232, p.239.

(14) ウォーレスの未発表論文において提起されたそうである。ただしその内容は、パーソンズやデイヴィドソンの前掲論文等で充分に知ることができる（Parsons 1985, p.260; Davidson 1985a, p.239）。

(15) Parsons 1985, p.260.

(16) B. Taylor 1985, p.99ff. 厳密には、テイラーが紹介しているエバァンスの問題は形が異なり、最後に「(∃x)(Violent(x) & ~Violent(x))」が導き出されるようになっているのであるが、本質的な違いではない。

(17) *ibid.*, pp.102–103.

(18) たとえばJ・ホーンズビーが比較的早い時期にこの点を指摘している（Hornsby 1980, とくに pp.124–132）。L・B・ロンバードも基本的に同様の考え方をする（Lombard 1985）。もっともデイヴィドソンがこうした観点を全く排除してきたわけではない（注の（24）も見よ）。

(19) 「他動性」という言葉をあまりに字義どおりに解釈するのは適切でない。たとえば、矢が飛び出ないように強く押さえつけるといったケースも、この観点から捉えることができるものと私は考える。また、いわゆる「他動詞」を含んだ行為文の全てがこのような論理形式をもつわけでないことも明らかである。たとえば私が基礎行為として腕を上げる場合、私の腕が上がることの他に、そのことをひき起こす何ごとかを私が為すのではない。ゆえに合図を送ることも、端的に腕を上げることに尽くされるかもしれない。また私が誰かを尊敬するとしても、その人の身の上に何か出来事が生じることはないだろう（この最後の論点に関しては拙論 1993b を参照）。

(20) 行為の結果を受動形で表すことに決めると、他動詞を含む行為文は一般に、

$(\exists e_1)(\exists e_2)(\mathrm{Action}(\mathrm{AGENT}, e_1)\ \&\ \mathrm{Was}\ \phi\mathrm{ed}\ (\mathrm{PATIENT}, e_2)\ \&\ \mathrm{Caused}(e_1, e_2))$

と表現される。第一連言肢が「Action(AGENT, PATIENT, e_1)」となっていないことに注意する必要がある。行為のいわゆる〝対象〟、受動者は、行為の結果を表す連言肢のなかにのみ表現される。それは行為の〝対象〟が、その行為をどのような動詞を用いて記述するかによって異なるからである（第5節を見よ）。

(21) (j)の代わりに、ボールがポケットに入るという出来事の存在を含意しない形を考えても不都合はない。次の文を考えよう。

メアリーは8番ボールをサイド・ポケットへ向け、そして9番ボールをコーナー・ポケットへ向けて、打った。(Mary hit the 8-ball to the side pocket and the 9-ball to the corner pocket.)

たんに8番ボールがサイドポケットへと向かうようメアリーが意図しただけでは、このように言うことはできない。すくなくとも8番ボールがサイドポケットの方向へと向かって転がることがひき起こされなければ、このようには言われない。8番ボールがサイドポケットの方向へと向かって転がることは、ある時点からある時点までのボールの運動として記述され、それ全体を一つの出来事と見なしてかまわないだろう。行為が何らかの結果をもつかぎり、(j)と同形の整式化が可能なのである。

(22) Davidson 1967b, pp.125–126〔一六五－一六七頁〕. だが、一九八〇年に加えられた注の中でデイヴィドソンはカスタニェーダのコメントを、より重要なものと受け止めている（*ibid.*, p.126n）。

(23) Davidson 1967a, pp.110–115〔一三七－一四五頁〕.

(24) たとえばDavidson 1985a, p.237. 「「アーサーはその飛行機を爆破した」は、必然的に二つの出来事を含意（involve）する。すなわちアーサーが為した何ごとかと、その飛行機の爆発である」（*ibid.*）。

ただしこうした観点は、彼が「殺害」を「死をひき起こす何ごとかを為すこと」と規定したときにすでに暗示されていた（Davidson 1971, p.58〔八六頁〕）。

(25) Davidson 1985a, p.239. デイヴィドソンは、警戒させること（alerting）にはその対象（alertee）が必要であるが行為者は必要でないという趣旨のことを述べている。一般にある人が警戒することは誰かがその人を警戒させたことを含意しない、というのがその論拠である。この論点は行為の他動性の観点によってこそうまく説明される。説明のためには、「(∃x)(Was alerted(the prowler, x))」が、警戒させるという行為が存在しないケースでも成り立ちうることを確認すればよいのである。それは英語においてはごく自然なことであり、また、そもそも行為の結果を受動形で表現することにしたのはきわめて便宜的な理由によるものであった。そしてなお、警戒させるという行為には行為者は不可欠である。

(26) 行為の他動性の観点がアド・ホックなものでないことは、それが、行為の生起の時間の特定に関する七十年代来のある問題の解決にきわめて有効であることからも分かる（詳細は拙論 1993a）。また、後述の(y)に見るように、その観点から、あるタイプのいわゆる〝～によって〟関係（'by'-relation）の非対称性が正しく表現される。

(27) たとえば Anscombe 1979, pp.232–233。

(28) この例はB・オーヌに由来する（B. Aune 1977, p.29）。ただし例の状況は多少改変した。

(29) 例はD・ウィギンズによる（D. Wiggins 1985, pp.296–297）。

(30) 例はパーソンズによる（Parsons 1990, p.304, n.13）。

(31) 時制は、時点を存在者と見なし、述語に時点のための座に組み込んだ上で、それに関する量化文の形の違いとして表現されることになるだろう。時制の問題はもちろん重要であるが、この論文では時制についての表現は必要最小限に止め、あえて論じないでおく。

(32) Bennet 1985, pp.203–206; 1988, pp.185–186.

(33) たとえば Taylor 1985, p.26, p.90; あるいは、全面的な拒否でないにせよ、Bennet 1985, pp.194–195; 1988, ch.12 や、Parsons 1985, pp.262–265; 1990, pp.164–165, p.304 において。ただしアンスコムはこのかぎりではない。

(34) Bennet 1988, pp.185–186.

(35) 関連の議論を拙論 1993b においても行なった（*ibid.*, pp.114–115）。もちろん私は、行為には固有の主体が存在するという直観を否定しない（そのことは(o)や(p)の第一連言肢に示されている）。明らかに関連があると思われる行為者性の問題について論じるには、しかし、稿を改めねばならない。

(36) ただしそれらは、「飛行機の尾翼が尾翼以外の部分から取れたこと」や、「あるいは飛行機の尾翼以外の部分が尾翼から取れたこと」とは微妙に異なる出来事を記述している、と主張する人がいるかもしれない。

(37) いわゆる基礎行為と非基礎行為の関係のうち、因果関係を含意しないタイプについては、F. Stoutland 1968 において明確に指摘されている（*ibid.*, pp.473–474）。なお、ここでは伝統に従って「基礎行為」、「非基礎行為」という表現を使用しているが、それらは行為の記述を特徴づける表現であり、行為の異なるクラスの名称ではない。また同様に「規約的な行為」も、何らかの取り決めや慣習の存在を前提として初めて可能となるような仕方で記述された行為という意味である。

(38) 多義性とはこういうことである。ふつう(s)の日本語文は、警告の発し先である相棒が丘の上にいる状況に関して用いられる。この場合「丘の上に向かって」は「丘の上にいる人に向かって」の意味である。したがって、論理形式は次のようなものとなり、問題とされている状況とは明確に区別される。

(∃x)(∃t)(Warned(the sentinel, his partner, x, t) & Was on(his partner, the hill, t)).

ここで言う警告（warning）は、(f)における警告（alerting）と異なり、警告の対象が警告に気づくことを含意しないと考えられる。見張り役が警告したにもかかわらず相棒は全然気づかなかったというケースが可能だからである。しかし、警告したそのときに相棒が丘の上にいることを含意するものでなければならないだろう。(g)などにおいては、「Caused(e_1, e_2)」という関係が問題の二つの出来事の間の時間的関係をも規定すると考えられることから、時間的関係について明示せずにすますことができたが、ここではそれが必要である。ただし、以上における時間の表現は必要最低限のものである。

(39)「ゆっくり」の記述依存性に対するこうした分析は一応有望と思われるため、多くの論者達が自然に受け入れている、あるいは示唆している（たとえば I. Thalberg 1985, p.141; Parsons 1985, p.251; Wiggins 1985, p.299）。だがこうした分析をより正確に述べるとなると、〝副詞句イギリス海峡横断のクラス〟や〝イギリス海峡横断という性質の性質〟に触れざるをえないと思われる。しかしそれは、一階の量化言語にこだわるかぎり、デイヴィドソンに受け入れられることではないだろう（Davidson 1970a, p.183; 1985a, pp.240-241）。

(40) したがって私には、アンスコムの具体例は彼女の一般的な論点ほど強力でないと思われる。彼女のあげている例は次のようなものである。AがBから現金で物品を購入することによってBの身内であるCを買収した場合、AのBからの物品購入とAによるCの買収との同一性（当然アンスコムはこの同一性を認める）から、「Aは現金でCを買収した」という文が導き出される。アンスコムによればその文は「正しくない」（Anscombe 1979, p.232）。しかし私は、この文脈で「現金でCを買収した」と述べるのもある意味で正しいと主張したい。多くの文脈において全く別の種類の行為に対しその表現が使用されるということは問題にならない。この種の多義性は驚くべきものではない。銃床で殴り殺した場合でもわれわれは「銃で殺害する」と表現する。そしてそうした多義性は状況のより詳細な描写によって消滅するのである。

(41) Parsons 1990, p.164-165, p.304. パーソンズが述べるには、オズワルドによるケネディ暗殺とケネディ狙撃は同一であるが、彼が引き金を引いたことは別の出来事である。しかしこうした方針は、出来事の同一性の規準が独立に示されないかぎり、本質的にアド・ホックであると言えよう。

(42) ここで言う「他動的」はもちろん第4節で指摘した行為の他動性と対応する。しかし私は、「～で（with...）」を含む他のタイプの文も(y)に、すくなくともある部分、類似した論理形式をもつと考える。たとえば「懐中電灯で合図を送る」もまた、「懐中電灯をどうにかする（たとえば振り回したり、点滅させたりする）ことによって、合図を送る」と言い換えることができる。だが、こうしたタイプの文に対し(y)に相当する論理形式を与えるには、規約的な行為の記述を含むタイプの〝～によって〟関係の非対称性を説明するという課題が残されている。

(43) $OBJECT_1$ の場所に行為者の身体部位が入る場合、(y)の第一、第二連言肢に相当する行為の記述はいわゆる基礎行為であろうから、(y)のように表記することはできない。たとえば「シェムは左手でショーンを殴った」にとって(y)に相当するのは、

$$(\exists x)(\exists y)(\varphi\text{-ed}(\text{Shem, Shem's left arm}, x) \ \&\ \text{Was hit}(\text{Shaun}, y)\ \&\ \text{Caused}(x, y))$$

である（ここでもまた、シェムがどのように彼の左手を動かして殴ったのかは具体的に特定されない）。

(44) このことは、副詞句「～で」のもつ本質的な多義性（注の（40）を見よ）を説明する。

(45)「弾丸で殺害する」という言い方が誤りでないことは、弾丸が話題となっている文脈を想像することにより容易に理解できる（「私はこ

の銀の弾丸で狼男を倒した」)。

(46) あることを手段として意図する場合と、目的として意図する場合の区別、さらに予想された随伴結果としてひき起こす場合との区別は、とりわけ道徳哲学の分野で以前からしばしば為されてきた。

(47) こうした記述が歴史的な事実と合致しているのかどうかは問題ではない(そもそも現実にオズワルドがケネディを撃ったのかどうかさえ私は問題にしていない)。

(48) 「で(with)」にこのような意味があることもたしかである。もっぱら反動の感触を楽しむ目的でオズワルドが銃を試射していたところに不運なケネディが車で通りかかったという場合でも、彼はやはり銃でケネディを殺したのである(だがこの場合「銃を使って」とは言いがたい)。

(49) 手段と目的に関する以上の議論とは別に、すぐに付け加えなければならないと思われる条件は、「$OBJECT_1 \neq OBJECT_2$」である。描写された状況において、オズワルドはケネディを撃つことによってケネディを殺害したのであるが、これは

$$(\exists x)(\exists y)(\exists z)(\mathrm{Action}(\mathrm{Oslwald}, x) \ \&\ \mathrm{Was\ shot}(\mathrm{Kennedy}, y) \ \&\ \mathrm{Was\ killed}(\mathrm{Kennedy}, z) \ \&\ \mathrm{Caused}(x, y) \ \&\ \mathrm{Caused}(y, z) \ \&\ \mathrm{Caused}(x, z))$$

ということである。ところが、もしこれをそのまま(x)の形に書き換えると、

オズワルドはケネディでケネディを殺害した

となる。この文はナンセンスである。

文献

Anscombe, G.E.M. (1979), "Under a Description," *Noûs*, 13, 219–233.

Aune, Bruce (1977), *Reason and Action*, D. Reidel Pub.

Bennett, Jonathan (1985), "Adverb-Dropping Inferences and the Lemmon Criterion," in Ernest LePore & Brian McLaughlin (eds.), *Actions and Events: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson*, Basil Blackwell, 1985〔以下 *PPDD* と略記〕, 193–206.

—— (1988), *Events and Their Names*, Hackett Pub.

Clark, Romane (1970), "Concerning the Logic of Predicate Modifiers," *Noûs*, 4, 311–335.

Davidson, Donald (1963), "Actions, Reasons, and Causes," in *Essays on Actions and Events*, Oxford U. Pr, 1980〔服部裕幸、柴田正良(抄)訳『行為と出来事』勁草書房、一九九〇年、以下 *EAE*〕, 3–19.

—— (1967a), "The Logical Form of Action Sentences," in *EAE*, 105–122.

—— (1967b), "Reply to Castañeda," in *EAE*, 125–127.

—— (1967c), "Truth and Meaning," in *Inqiries into Truth and Interpretation*, Oxford U. Pr., 1984〔野本和幸他(抄)訳『真理と解釈』勁草書房、一九九二年、以下 *ITI*〕, 17–36.

—— (1969), "The Individuation of Events," in *EAE*, 163–180.

—— (1970a), "Events as Particulars," in *EAE*, 181–187.

—— (1970b), "Action and Reaction," in *EAE*, 137–148.

—— (1971), "Agency," in *EAE*, 43–61.

—— (1977), "The Method of Truth in Metaphysics," in *ITI*, 199–214.

—— (1985a), "Adverbs of Action," in Bruce Vermazen & Merrill Hintikka (eds.), *Essays on Davidson: Actions and Events*, Oxford U. Pr., 1985〔以下 *EDAE*〕, 230–241.

—— (1985b), "Reply to Irving Thalberg," in *EDAE*, 227–229.

Hornsby, Jennifer (1980), *Actions*, Routledge and Kegan Paul.
柏端達也 (1993a)、「殺害の時間の問題 ― 出来事に関するD・デイヴィドソンの見解をめぐるある論争について」『年報人間科学』14、一一七―一二〇頁。
―― (1993b)、「"単なるケンブリッジ変化"と出来事の記述」『科学哲学』26、一〇七―一一九頁。
Lombard, Lawrence B. (1985), "How Not to Flip the Prowler: Transitive Verbs of Action and the Identity of Actions," in *PPDD*, 268–281.
Parsons, Tarence (1970), "The Logic of Grammatical Modifiers," *Synthese*, 21, 320–334.
―― (1985), "Underlying Events in the Logical Analysis of Engish," in *PPDD*, 235–267.
―― (1990), *Events in the Semantics of English: a Study in Subatomic Semantics,* MIT Pr.
Stoutland, Frederick (1968), "Basic Actions and Causality," *Journal of Philosophy,* 65, 467–75.
ライヘンバハ、H.、『記号論理学の原理』(石本新訳、大修館書店、一九八二年)。
Taylor, Barry (1985), *Modes of Occurrence: Verbs, Adverbs and Events*, Basil Blackwell.
Thalberg, Irving (1985), "A World Without Events?" in *EDAE*, 137–155.
Wiggins, David (1985), "Verbs and Adverbs, and Some Other Modes of Grammatical Combination," *Proceedings of the Aristotelian Society*, 86, 273–304.

Problems with Adverbial Modification and the Existence of Actions and Related Events

Many puzzles have been raised regarding Donald Davidson's theory of adverbial modification from the time it was introduced in the 1960's. Though individually proposed, more than a few of these puzzles suggest the more comprehensive dependence of adverbials upon verbs (descriptions of events) than Davidson assumed. If this suggestion were correct, it would be a serious threat to Davidson's theory, since the basic idea of adverbials as predicates of such entities as actions or events would be undermined. However, the conclusion of this paper is that Davidson's basic idea is tenable. The path to the conclusion is not straightforward. In this paper, I will defend the conclusion by considering the transitivity of actions, analysing so-called 'conventional actions' and adverbials containing 'with' (e.g. 'with the gun'), and thereby refining Davidson's original formalization of action (event) sentences.

Key Words

adverbs, adverbials, Donald Davidson, actions, events